

## 第二章 警備

### 第一節 防空警備

#### 一 防空監視並に警戒

防空監視は其の主体を民監視哨に置き、朝鮮全域に亘り構成しありたるも其の配置は地勢と人口密度特に利用通信網の關係に依り地域に依り著しく濃淡あり特に満鮮國境方面並に東海岸方面は疎散なり。又其監視隊員は殆ど朝鮮人を以て組織し而も其の國語能力十分ならず日本人は一部に過ぎざりし爲監視及通報々告能力十分ならずとのありき。依て軍防空監視部隊を重要方面に配置し民防空の欠を補ふこととし龍山に防衛司令部を置き防空監視隊第四十一乃至第四十七の七隊を有し主として対蘇關係に重きを置き其の悉くを東海岸地及羅津より釜山に至る間に展開せり。然るに昭和十八年末頃以降対米防空の轉換を要するに至るや昭和二十年四月頃より逐次要度對米方面より三隊を抽出し西方海岸方面重要地域に轉移せしめたり。(附圖第

五、参照)

離島に於ける監視上の要素は一に迅速なる情報の入手にあり、二に無線通信の確保、速通は実施上困難とする所なりき。

防空監視部隊は当初防空監視隊、防空通信隊の各独立的存在なりしも昭和十八年六月此等を統合し且新に警戒隊を新設し茲に防空情報隊新設せられたり。

警戒隊は当初二隊より成り、第一警戒隊を以て東海岸に第二警戒隊を以て西海岸に展開し其の態勢附図第五の如し。

当時警戒機乙は阿蘇地、金谷、群山の三機に過ぎず特に西海岸正面に在りては相当の間隙を有し之が増強を要する事切なる所ありき。

偶々昭和十九年六月北九州の爆撃開始せらるゝや九州島地区は敵機の主要通過地となり茲に左記の如き第一次補充計画に基き先づ飛鳥島に一機を増設せり。

0039

第一次警戒機補充計画要旨

西海岸正面に重点を指向し間隙を閉塞すると共に同一地兵に二機宛を設置し常統的警戒能力を附与す。即ち新義州、金谷、仁川、群山、飛禽島に各二機を設置す。

本計画は飛禽島に引続き、群山、仁川、新義州、飛禽島、金谷の緩急順序を以て鋭意施設を実施し昭和二十年終戦時に於ては概ね完成するに至れり。

本機の能力は実敵を邀へ捕捉距離約二五〇料に達し其の性能を發揮せり。昭和二十年に入るや更に左記の如き第二次補充計画に基き、整備に努めたるも全部の完成を見ずして終戦に至れり。

第二次警戒機補充計画要旨

要度少き警戒機甲を整理すると共に新に要地<sup>角</sup>移動用警戒機を設置し航空作戦に密に協力す。即ち漢大津、高城、浦項、釜山、木浦、群山、仁川、京城、鎮南浦、新義州に要地用警戒機を増設す。

0040

本計画は僅かに高城、釜山の施設のみを完成し終戦に至り。

斯くの如く防空情報隊の任務は一般防空のみならず航空的任務の遂行を必要とするに至りたるを以て昭和十九年七月十五日従来の防空情報隊を朝鮮軍航空情報隊に称号変更せられり。同部隊は昭和二十年四月二十五日更に拡充強化せられ航空總軍の隷下に転属せられしも当分の間方面軍司令官の指揮下に在りて従来如く情報任務に服せり。

電波兵器は逐次実用化するに至りたるも同兵器の性能を遺憾なく發揮せしむる爲同年末財統の計画に基き各軍に研究会を設置することとなり軍に於ては「朝鮮軍科學研究会」を組織し京城帝國大學宇安宅教授以下五名を軍囑託とし毎月概々一回京城或は現地に於て研究会を実施し同兵器の性能發揮を遺憾なくせしめたり。

而て城大實驗室に於て試作せる小型防空機乙は制式兵器到着迄仁川に展開し実用の域に達しり。

0041

二 防空情報、警報並に通信

朝鮮に於ける防空情報勤務は鮮内情報網の不備に加へ、遠距離情報は全く他軍に依存ありき。電話情報は在り<sup>防総監</sup>西部軍との通信連絡は最も緊密に実施し得るも、関東軍、同防衛軍との連絡は円滑に欠き、無線情報に在りては支那方面、台湾方面軍との連絡十分ならざるものありき。敵の北九州、滿洲方面出撃開始せらるゝや、鋭意大陸方面との通信施設を改善し、爾後良好なる状態となれり。

一方鮮内に於ける情報は、總督府、遞信局、警察、鉄道通信網に依り、概ね各種情報入手し得るも、遠隔せる監視哨の情報入手は十五、二十分にも及ぶものあり、又監視能力の不足に基き、誤情報尠<sup>すくなく</sup>からざるものありき。

敵機未襲に關する情報放送は西部軍に於ける経験並に中央の指示に基き、昭和十九年八月より之を開始し、爾後各地に防空司令官にも此の権限を附与せり。

而て朝鮮に於ける情報放送は国語諺文の二重放送、「ラヂオ」聴取者の加入者少キ、等、爲情報の末端徹底に至りては困難性ありたり。

警報の発令に關しては従来軍司令官に於て統制発令し来りたるも敵機来襲の経験に基き昭和十九年九月以降滿洲特擧の羅津、羅南、咸興、平壤地を司令官及海軍との關係密接なる釜山要塞司令官に對し隣接地に警報発令ありたる場合のみ独断警報の発令權限を附与し昭和二十年四月以降は各地に防空司令官に對し各種警報の全面的發令權を附与するに至れり。

警報の伝達速度は必要中樞地迄に至る迄は概ね迅速なりしも一般民衆への徹底は地域に依り著しく遅速あり京畿道に於ても末端徹底迄迄三分を要する状況にありき。且軍内に於ても防空準備に相當の時間を要するに鑑み内地中部軍の例に倣ひ昭和十九年九月以降「防空戦士準備警報」を設定し一般警報に先ち防空部隊、高射部隊等に戦士準備せしむることとし昭和二十年四月以降之を「防戦警報」

に改め防空作戦の爲防空作戦準備を遺憾ならしめたり。

従来總督府指導の下毎日七時及十二時に全鮮一斉にサイレン吹鳴を行ひ一分間の黙待と実施し朝鮮国民精神統合指導の一助として多大の効果を收め来りしも敵機の来襲に伴ひ之を中止せり。

爾後警報吹鳴の時間に関しても内地に類応し短縮せり。

朝鮮に於ける防空通信網は内地に比し極めて不備にして軍専用線は数少に足らず其の多くは遞信向線の優先取扱、警察、鉄道電話に依存しありたり。之が爲昭和十九年中期より有線通信網の整備に着手し先づ主要幹線通信網の強化を実施すると共に一方軍保有の無線通信器材を各地区司令部に配属展開し漸く勤務遂行に支障なきに至り。朝鮮に於ける通信の弱体の一は電話交換局に於ける朝鮮女子従業員に在りて通信連絡の遅速の影響する所亦尠なからざりき。

情報、警報、通信の勤務は従来軍隊兵員を以て勤務しありしも防空情報隊の拡充に伴ひ此等業務の一部を日本女子を以て交代せしむるを有

0044

利と認め昭和十九年三月先づ軍司令部内防空庁舎勤務要員として  
在學中の高學年女學生百名を採用し好結果を得たるを以て其の後  
之を二百五十名に増強し昭和二十年四月航空情報隊の改編に方りては  
編制上に認めらるゝに至れり。

### 三 防空指導訓練並に施設

朝鮮に於ける民間防空は由來低調にして大東亞戰爭開始後昭和十八  
年末頃迄に於ては防空施設又訓練に於ても見るべきものなかりき。

昭和十八年中期改州に於て大爆撃開始せらるゝや従來の防空思想に一  
転機を来し茲に防空施設並に訓練の劃期的促進を叫ばるゝに至れり。  
即ち十月中突に於て防衛主任の合同あり軍は之に基き、各部隊防  
衛主任を召集して集合教育を実施すると共に官民防空指導の爲には  
先づ總督府始め官庁幹部の指導能力を向上するの要あるを認め、  
十二月先づ軍司令部内に於て兵棋に依る準備研究を行ひ十二月總  
督府各局、京畿道庁、京城府庁の關係向課長を參集し二日間



に亘り兵棋演習を實施し多大の成果を收めたり。是に依り軍官両者の精神的連絡意志疎通を固り得たるは豫期しあがりし收獲にして爾後防空に関することのみにあらず一般業務上の連絡をも緊密ならしむるに効果ありたり。従来防衛に關し軍司令部總督府間に「防衛連絡委員会」を構成しありて防衛に關し各種意見を交換し来れるも次第に低調となりありしを以て今後少くとも毎月一回開催することせり。本委員会は昭和二十年三月迄続行せると本上天戰準備の完整を期する爲同月總督、軍管区司令官、鎮海警備府司令長官の三者申合せに依り茲に新しく左記委員会を構成することとし作戰、防衛、情報、運輸、生産、勞務等各般に亘り總力を結集して戰爭遂行に邁進することとせり。之が爲従来の防衛、防諜委員会等は之に包含せらるゝに至れり。

左記

中央連絡委員会（總督府、陸海軍の關係者を以て組織す）  
地方連絡委員会（軍管区毎に軍官關係者を以て組織す）

地区連絡委員会(各道)毎に軍官関係者を以て組織す

防空の指導は總督府として之に当り、軍は強力に之を支援し、未れども昭和十九年春季以降總督府関係官を主体とする防空査察班を編成し巡回指導を実施せる結果防空施設訓練共兵民の進歩を見たり。此の間總督府防空顧問として蒞田中將と幹旋招揚し、同中將は一ヶ月間或は防空査察に出場し、現地指導に或は朝鮮防空施策を建言する等、民防空刷新の爲貢獻せる所大なるものありたり。

防空指導の部門は都市防空を始めとし、工場、鉄道、港湾、通信に重点を置き、施設に於ては分散疎開、耐弾、偽装、燈火管制、消防火、情報、通信、待避施設等各般に亘り、以下特記すべき事項に關し若干述べんとす。

都市防空は京城、釜山、平壤を第一とし、屢々兵棋及び実地の訓練を実施せるも、其の着手は内地に比し遅し、本格的な規模施設に着手せるは昭和二十年以降とす。其の顯著なるものは防火地帯の設定にして先づ

0047

三大要地の重要建築物、交通沿線の疎開を実施し概ね所期の目的を達成せり。洞窟式待避施設は四月以降着手せり之が完成を見るに及ばず終戦となり人口疎開、學童疎開は遂に其の實現を見るに至らざりき。

工場防空は当初より重視せり之にして鮮内重要工場は殆ど査察を完了せしむ防空資材の不足は之が完成を見ずして終戦となり

昭和十九年以來査察せる工場の主たるもの左の如し

水豊発電所、兼三浦製鉄所、鎮南浦軽金属工場、素砂小林磁業、龍山鉄道工場、阿吾地人造石油工場、清津日鉄工場、城津高周波工場、興南日室工場、元山朝鮮石油工場

鉄道及港灣等交通防空は國軍戦争遂行上中央に於ても最も重要視し軍亦有ゆる機会に於て之を支援し来れり。鉄道に於ける隘路は橋梁にして其の主なるものは鴨綠江、清川江、大寧江、大同江、漢江、洛東江、倭館洛東江の各橋梁とす。特に鴨綠江、清

0048

之が復旧困難にして而も清川江は  
川江は昭和十九年末京釜、京義線の複線工事完成後に於て單線  
の狀態に在り、關東軍亦朝鮮鐵道を重視し夙に大陸鐵道運用の一  
元化を提唱しありて茲に關東軍の支援協力の下に前記二大河川架  
橋に依る迂回鐵道橋を架設するに至り昭和二十年春季より着工せり  
列車防空中機関車の防空は南方及支那に於ける戰訓に基き之が  
分散疎開掩護の強化を図ると共に交通向に於て機関車の防彈裝  
置を研究実験せしむ所望の成果を得られりよ。  
昭和二十年五月以降鐵道に對する敵機の出撃と見るに及び鐵道  
警備大隊に依る對空射撃部隊の警備を実施するに至り、  
港灣防空に於て最も重視せしは釜山にして其の主眼は船舶の疎  
開退避と関釜連絡船乗客の処理にありき、而る船舶の疎開退避  
は海軍の担任にして釜山海軍武官之を掌り特に大型船舶の疎開は  
実行上難矣と存し一方船車連絡上に於ては数千名に上る乗客の  
待避行動は最も問題とする所なりき。

0049

由來釜山は内地よりの関門にして軍官共に隷屬を異にする各種の部隊機關存在し此等をして統制ある行動を採らしむるは最も困難とする所なりと、軍閥係の部隊に於て昭和十九年三十数箇昭和二十年に入り四十数箇の多数に達し官民側に於て一鉄道に於ても内地鐵道向と關連し此等複雑なる關係は釜山の防空侵進を阻害したる最大原因たりしなり。

0050